

平成23年度 第2回宮城県農村振興施策検討委員会

開催日時：平成23年11月10日(木)

開催場所：加美町小野田公民館

議 事 録

平成 23 年度第 2 回宮城県農村振興施策検討委員会

司会：只今より平成 23 年度第 2 回宮城県農村振興施策検討委員会を開催いたします。
大泉委員長よりご挨拶をいただきます。委員長よろしく申し上げます。

大泉委員長：農村振興施策検討委員会の委員長をしております大泉でございます。本日は、本年度第 2 回目の委員会になります。委員、専門委員の皆様にはお忙しいところを出席いただきまして感謝申し上げます。それから本日各協定の皆様、関係市町の担当者の皆様におかれましても、現地での説明や意見交換にご出席いただき、本当にありがとうございました。とりわけ、大尺の集落協定、内川ふるさと保全隊、小野田城内地区の方々には、丁寧なご説明をいただきありがとうございました。

これから、各協定の現状と課題、あるべき姿の施策効果と言いますか、そういったもろもろの点について、ディスカッションをさせていただければというふうに思います。時間が限られておりまして、一時間半程度しかありませんので、議論を効率的に進めたいと思っております。ご協力のほどお願いをしたいと思います。本日はありがとうございました。

司会：どうもありがとうございました。それでは討議に入ります前に、資料の確認をさせていただきます。封筒の中に、農村振興施策検討委員会資料というのがあります。それから委員の皆様方には、優良表彰の実施についてのワンペーパーが入っております。それからパンフレットが 2 部でございます。不足でしたら、言っていただきたいと思います。なお、会議の記録作成をしますので、発言の際はマイクをお使いになっていただきたいと思います。

本委員会の条例第 5 条の 2 によりまして、委員の過半数以上が出席しておりますので、本委員会は成立しております。また県の情報公開条例に基づき公開ですので、予めご了承願います。

それではここからは、大泉委員長に意見交換会等の進行をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

大泉委員長：それでは活動組織との意見交換と申しますか、ディスカッションを始めたいと思いますが、進め方としましては、各事業毎に意見交換を行いまして、その後三箇所、合同で行いたいと思います。

最初は大尺の集落協定ですが、今日は先程ご説明いただいた会長さん副会長さん、集落内でご不幸がおありになったということで、残念ながらご出席をされていませんが、代わって市役所の鳴子支所から関根さんにお出でをいただきましたので、ご説明をお願いしたいと思います。

鳴子支所 関根氏：それでは大尺の交付金事業といたしまして、最初に現地のほうでお配りした写真等でご説明いたしました。主にこういった水路の雑草の刈払い、法面補修、水路の整備などを行っております。現地でお話させていただいたとおり、大尺につきましては二つの町内会によって協定を組んで、行っているという状況です。その後、地元川渡小学校、そちらとも協定を組んで、農業体験をしているということです。この間の 11 月 7 日には、自分達で刈り取った餅米で餅つきをやって、たいへん大盛況に終わっているということでした。3 年ほどぐらい前から、この資料の右下にあります「まこもたけ」の栽培を試験的に実施しています。面積はそんな広くなくて、5,000m² くらいの規模しか作っていませんが、ブルーベリーも 100 本ほど植えていると説明がありましたが、どちらも自家消費栽培で、ブルーベリーについてはその二つの町内会の子供会によって、摘み取り体験をさせているようです。「まこもたけ」は協定内の中とか、その他町内会の方々に分けて、試食程度で消費していると。将来的には販売も考えているようですが、そこまで

は現在至っていないという状況でございます。簡単ではありますが、これで説明としてはよろしいでしょうか。

大泉委員長：ありがとうございます。17戸でしたよね。17戸で15ヘクタールの農地を対象に、中山間地の直接支払いをやっていて、その中で高付加価値化農業をやっているという。高付加価値なんだよね。付加かどうかわからないけど、まこもたけと、減減米をやっている。でも値段は高くななくて。減減米とブルーベリーとまこもたけをやっていると。先程まこもたけって何かという話がありましたので、加藤専門委員には、まこもたけを取り寄せていただきました。こういうやつだそうです。これどうやって食べるのか、よろしかったら説明ありますか。

長田委員：ちょっと甘みがあるんですね。

おのだ城内 府田氏：たけのことと同じなので、剥いて。

長田委員：料理法は炒めたりとか。

おのだ城内 府田氏：なんでも合います。

長田委員：なんかこれちょっと育ち過ぎだという。

加藤専門委員：古いやつだから、もう食べられないんです。

おのだ城内 府田氏：炒め物でもいいし、サラダでもいいし、おみおつけでも大丈夫です。

鳴子支所 関根氏：食べ方として聞いているのは、天ぷらときんぴら、わさび醤油でお刺身みたいな感じでいただくというふう聞いております。ただどうしても収穫時期が一週間からそこらしか採れないので。

大泉委員長：城内でも作っているんですか？

おのだ城内 府田氏：私の友達、下野目という所で、やっているんですけども、今からでもまだまだ食べられますね。

加藤専門委員：これでは遅いんですわ。食べれますけどね。

長田委員：高価なんですか。

大泉委員長：値段。

加藤専門委員：安いです。実が入っていませんので。これは流通してませんので、直売所等で売っただけです。

大泉委員長：だから高付加価値化農業と言っても、イメージがあんまり湧かないんだよね。中山間地の直接支払の交付金は共同作業かなんかに使ってるんですよ。

鳴子支所 関根氏：はい。

大泉委員長：どういうことやってるのか説明してもらえますかね。

鳴子支所 関根氏：大尺では、協定を結んでいる17戸全員で、皆さんの田んぼを作業していると言いますか、そういった状況です。鈴木代表が、現地でおっしゃった通り、年齢層がどうしても高齢化というのがかなり問題でありまして、若手育成と言いますか、担い手と言いますか、30代の方が一名、40代が一名、50代が二名、あとそれ以上というような感じになっておりまして、どうしても兼業農家が主だというのが現状、大変厳しいですという状況ですが、うまくそこを回してやっていると言いますか、そんな感じですか。

大泉委員長：ありがとうございました。それでは委員の方々にこの地域の大尺の感想などを伺えればと思いますが、どうですか、はいどうぞ、加藤さん。

加藤専門委員：加藤です。よろしく願いいたします。仮に例えば仙台とか東京から、その地域に新しいよそ者、若者が入ったら、おそらく変わってくるのではないかなと感じました。会長さんをお願いしたいのは、若者がいないと言うのであれば、今加美町でいますけども、地域おこし協力隊みたいな、そういった国でやっている事業制度をうまく利用して、それでそこに引っ張り込むと。そしてカンフル剤に使えると。農業をやりたいという考えを持っている方がかなりおりますから、そういった方と市で、集落で解放してもらう方法もあるのではないのかなと感じましたので、今後の課題にさせていただければなと思います。

大泉委員長：はい、ありがとうございました。後で回答があればお願いしたいと思います、取りあえずこちらで回していきますので、どうぞ。

長田委員：現在は大変いい取り組みをしていると思うんですが、やっぱりどこの地域でも中山間地域の事業では、気になるのはやっぱり高齢化という問題ですよね。周りに若い人が全くいないのかというところなんですよね。その人達をどう取り込んでいくかというのが、どこの地域でもこれからの課題なのかなと思うんですが、この書面では3の今後の課題ということで、そのブルーベリーと「まこもたけ」など付加価値を高めた農産物の栽培拡大と記してありますが、具体的に何年後にこうするぞという目標を市場に出して、こうして売ってくぞというふうな目標を定めるほうがいいのではないかなと、提案みたいになりますけど。そしたら若い人達もじゃあ自分も参加しようかとか協力しようかということになるんじゃないのかなと聞いてて思いました。

大泉委員長：ありがとうございました。この他どうですか。はい、どうぞ。

島谷委員：今日は大尺に伺うために途中で小型のバスに乗り換えさせていただき、いったいどういう所かなと思いましたが、道幅が狭く高低差が大きい土地で、この地域の皆さんは毎日たいへんなご苦労をなさりながらお米を作っておられるのだということがよくわかりました。

そして、そういう状況のなか、数年前からご説明いただいたまこもだけやブルーベリーなどの栽培を、いろいろなきっかけをもとにチャレンジして継続しておられるということはたいへんなことだと思えました。長田委員からお話がありましたが、私もせっかくお作りになっている農産物ですので、更に付加をつけるという意味でも目標を実現化していくことは大切なことだと思えます。

例えば、大尺は近くに川渡の温泉街がありますので、もしかするともう行っておられるかもしれませんが、収穫した農産物は是非温泉旅館と契約をして旅館でお客様にお出しただくとか、あるいは食べ方についても炒め物がいいのかあるいは煮物がいいのか、そういったところも作ってらっしゃる方が提案をして、お泊まりになった方あるいは観光客に

対してPRしていくということも大事だと思います。そして、この地域で農業体験している子供さんが、自分が収穫した農産物のことを自宅に帰ったあとでお父さんお母さんに話して、そしてその後家庭でも消費されていくということになれば、もっと広がってくると思いますので、そのあたりを進められたらよろしいのではないかなというふうに思いました。以上です。

大泉委員長：ありがとうございました。どうですか、はい沼倉委員。

沼倉委員：沼倉でございます。本当に中山間地の典型的な場所だなあとというふうに感じました。バスを乗り換えて行きましたけれども、本当にきれいに手入れをされてあって、皆さん本当に頑張ってらっしゃるんだなと感じました。必ず後継者の問題って出てくると思うんですけども、その必ずしも20代、30代の人居なくっても60代で、60になって定年になってそしてその人達が順にこう入っていけば、それはそれで地域は結構成り立つんじゃないかなと思うんですけども。そういうあたりはどうなのか、順次ですね定年退職されたら戻って来られる方がいらっしゃるのかどうか、ちょっとそこを教えていただきたいと思います。それから例えば仙台からの小学生なり中学生なりを受け入れて、一緒に農作業を手伝ってもらって交流したり、それも人手がかかるんですけども、ちょっと一歩前に出て少し外のいろんなものを、風を入れてみるというのも一つの方法かなというふうに思います。それと、ブルーベリーなんかはいろんな所で植えているというのは聞くんですけども、それを換金作物にしたというのは中々聞かないんですけども、それがそうならないのは、何かやっぱり理由が多分あるのではないかなと思うんですけども、私たち仙台にいて買い物、買いに行くときやっぱりブルーベリーって結構高いんですね。こんな小さなパックでやっぱり4、5百円するんですね。ですので大半はアメリカ産とかなんですけれども、そのもうちょっとその何かどっかでそういう仕掛けを作ってみて、そして消費者に売り込むというのも勇気を持ってやってみれば結構いいんじゃないかなと思いました。以上です。

大泉委員長：はい、ありがとうございました。はい、千葉委員さん。

千葉委員：委員長から感想とお話ありましたが、感想から言いますと初めて私そこへ行きましたけど、非常に素晴らしい所だなあとというふうに思いました。上から見たロケーションというのは本当に素晴らしいですね。中山間地という言葉ありますけどもそのイメージともまた違った、非常に素晴らしいロケーションが一つありましたし。もう一つは鳴子に行く街道の本当に道路の近くて立地条件としては中山間地と言っても、非常に恵まれた所だなあとというふうに思いました。それでこの課題の中にも書いてありますが、今後観光農園とかそういったことも視野にあるということなんです。仕事柄どうしても感じるんですけどもやっぱり道路ですね。道路がないとその観光農園もなかなか難しいのかなと。国道から非常に近いものですからね、それから一迫へ行く県道も二車線で両国道については素晴らしい道路があるので、そこから非常に近いものですから、ほんのちょっと手を加えれば人を呼び込むのにも非常にいい場所だなあとというふうに思います。これは協定というよりも県、市の仕事だと思うんですけども、是非そういった検討もして人を大いに呼び込むという形が取れば、自然と人も担い手と言いますかそういった方も増えるんじゃないかなというふうに思います。高齢化という話がありますが、先程聞くと30代の方、40代の方、50代の方いるということですね。17人の中にそれだけいれば私は十分ではないかなと思うんですね。今どこに行ったってそんな程度でですね、特別この地域が高齢化だということには私は思いません。ですからそういった人を呼び込むことによって地域が活性化してきて、おのずと担い手も出てくる、じゃやってみようとか、そういった人もでるのではないかなというふうに思いました。ブルーベリーなんかは本当に最近非常にど

こでも取り組んでおりまして、今お話したように立地条件が非常にいいものですから、摘み取りなんかも多分向かい側のあら伊達な道の駅ですか、そこの連携等もあれば摘み取り農園とか、そういったことも考えられるのかなという感じがしました。以上です。

大泉委員長：はい、ありがとうございます。いろいろ出ていますのであまりあふれ出ると大変だから、少し今の感想に対する感想で結構ですけど、どうでしょうかね。

鳴子支所 関根氏：本当に貴重なご意見ありがとうございました。今日、集落の方が来ていないので、これを参考にしてちょっと説明はしたいと思います。それで一応、販売の計画はされているようです。ただそこがどこまでというふうには決めてないようですので、まだ曇りの状態と言いますが、見えてないので、そこをしっかりと決めてもらうなり、設定をしてもらってやってもらうと思います。それで伊達な道の駅のほうに、一度はまこもたけを出したことがあるそうです。ですが、たいした儲けと申しますか利益が出ず、たいした量も採れていないので、出してないそうです。ブルーベリーですけれども、鳴子にそのブルーベリーの組合のような組織が実はありまして、そこの兼ね合いになると思います。単価の設定等ですね。今そちらの、中山間と別なんですけど、そのブルーベリーのほうもなかなか地元のケーキ屋さんとか、旅館ホテルではちょっと利用されていないような状況です。どうしても外国産のほうが安いというふうになってしまっていて。よっぽどこだわりのあるお店とかではないと、使っていただけないという現状もありますので、まあそれらも踏まえて、「まこもたけ」については安価ですから、そちらはいろいろ検討していきたいと思います。

大泉委員長：そんな感じですかね。あえて定年後戻って来るとかあるいは加藤さんが言っていたけど、新しく他地域から入って来るといった雰囲気というのは、あるんですか。

鳴子支所 関根氏：別な地域、鳴子の中でも鬼首のほうで山学校という所がございまして、そちらで今まさにそれをやっているはずなんです。当初12人、10人…ですかね、いたんですが、現在は確か6人程しか残ってないと思います。そちらの方々は現在鳴子で春秋いちごを約3つの農家さんが作ってまして、結局販売ルートも何もノウハウがないということで、そちらの山学校さんを経由して発注業務をやっているというような感じです。そういったものを利用してそういった他地域の方を、こちらに抱え込むと言いますか、こちらでも検討していきたいというふうに伝えたいと思います。退職後の方も中にはおります。おりますが決してその人がまだ農家に携わっているという現状でもないのです。先程も言いましたが、その40代一人とかなんとかというのは、この17名のうちの家族の方になりますので、決してこの17名のなかに、30代が一人とか40代が一人入っているわけではないんです。その中の息子さんとかになりますので、ほぼこの17名は高齢者だと考えてもらって結構だと思います。近くに東北大学の農場さんがありますので、うまくそちらも利用してもらってというような感じで進めていきたいと思っています。

加藤専門委員：市役所さんをお願いなんですけど、行政はもう少しほ場整備なり、農道整備なりを交付金制度があるようですから。中山間で一生懸命頑張っているのです、整備をお願いします。

大崎市役所：大崎市役所のまさにその担当をしております、ものづくり推進室の千葉でございますが、今道路の話が出ましたが、実は大尺の隣の地域から中山間の総合整備事業ではほ場整備を出来ないかというお話はありますので、今日当事者の方々がおられませんので、もし地域の要望がございましたら、なんらかの形で対応したいと思っております。

大泉委員長：はい、どうぞ。

真木副委員長：ほ場整備を進めていただければと思うんですけども、基本的には16ヘクタール程度の面積しかないわけですので、この中でみなさんが17戸で食べていこうというのも無理があるというふうに思います。したがってある程度付加価値というものを何かつけるものを作り上げないといけないんじゃないかというふうに思います。その付加価値を作り上げる方々が、30代40代では他に職を持っておられることから難しいと思いますので、リタイアされた方々がある程度自分の食べる分ぐらいはがんばっていただけるよう、何か付加価値作りをしていくことなんじゃないかなというふうに思います。ブルーベリーだけじゃ当然足りないと思いますので、いくつかの作物、果物だけに限らず、いろんな野菜を生産してみるとか、何かそういったことから始めてそれを今度加工していくとか、長い目でみたような構想、おそらく将来ビジョンみたいなものを作っておられるんだろうと思いますけども、そういったものをもう一回考えてみるのが重要だと思います。何かを創造していくような取り組みも必要じゃないかなというふうにちょっと感じました。

大泉委員長：はい、ありがとうございます。時間のほうが、一つ一つやっていくと来てしまいますので、後で合同の意見交換がありますので、次に進みたいと思うんですけど。司会のほうに伺いたいな。順番はこの順番でいいですか、それとも城内のほうへ行って内川の順番ですか。

司会：最初に小野田の城内を。

大泉委員長：小野田って、それから内川にくるのかな。大尺は、年齢構成、高齢化しているっていうけど、年齢構成から見れば、まあこういうのが普通じゃないのかなという意見もあるので、去年ですね、七ヶ宿町に行ってびっくりしたんですけどね、平均年齢70いくつだといって源流米とかよもぎを販売しているんですよ。それで若い人は入って来ないんですかと聞いたら、去年入って来たって言うんですね。おいくつですかって言ったら、60代って言うんです。やっぱりそれで若い人ですから、七ヶ宿町から見ればまだまだ。若い人は結構いるんだろうと思うんですね。販売も年取ったから出来ないということではなくて、多分これからいろいろトライアンドエラーしながらやっていかれるんだろうと思いますので、その点をお伝えいただければと思います。

それでは、また参加をしていただくことにして、小野田で農地・水・保全管理事業をおやりになっている、城内の報告をお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

おのだ城内 府田氏：先程おおまかな話はしたので割愛させていただきました。実は加美町に城内という行政区が二つあって、ここでやっているのが小野田城内、中新田のほうが中新田城内というような形で、名称をおのだ城内と。普通漢字ですけども、ひらがなでおのだ城内上区集落活動組織というのを作ったということでございます。さっき全体で140ヘクタールぐらいあると言いましたけど、協定面積140haあるんですけども、これはあくまでも県営ほ場整備された農地だけで、協定面積には未整備の小さい田んぼとか、そういう所は入っていません。先程抜けた部分等を主体にお話していきたいと思うんですけども、まず一つはグリーンツーリズム。町は集落協定前からグリーンツーリズムをやっていますので、私たちも積極的に取り組んで行こうということで。特徴的なのは加美町ですと普通、加美町全体に民泊するんですけども、小さな学校が来た場合には、当方の集落営農が一括で引き受けると。だいたい40人前後は、この地域内で農家の人達あるいは非農家の人達が引き受け、そして民泊をやると。農業体験については、出来ない家庭については営農組合のほうを追って一緒に体験活動をやると。出来ればお昼などは、全員揃って一同あそこのビオトープで天気がいいと外で、おにぎりや豚汁というような形で、あそこで和気あ

いあいとしながらお昼をとるといような形が非常に多いという情報が入っております。先日も被災した六郷の子供達、それから閑上の子供達が来ました。六郷は海沿いで壊滅したんですけども、閑上のほうは私ら集落営農で引き受けたと。昨日おとといですか、農業共済新聞にちょっと載ってましたけども、せっかく来て、何か手立てはないかということで、今の時期米しかない和我々は。玄米という形で地域内の方、農家、あるいは非農家の方にもご協力いただいて、だいたい千三百キロくらい集めまして、それを閑上のPTA会員の方に10キロごとに精米して、10キロずつ袋に詰めて送ったと。来たのは42名程の子供達なんですけども、PTA会員が約120名いるということなので、その方々に全員送ったといような形をしております。それからグリーンツーリズムで来た場合、さっきあんまりきれいでなかったという、これが今年作った、上が「絆 がんばろうみやぎ」といような、なんで今年はおそこのあと水田になったといような形で。何か毎年こいう形で絵を描くわけにはなかなかいかないので、こいう文字でやろうといような形でやっております。それから先程途中、加藤専門委員さんが請け合っている形でやってきました、加美町と提携して「地域おこし協力隊」といような方が、今加美町に三名来ております。一人は加藤専門委員が受けております。もう一人は、下野目の方が受けております。それからうちらほうは、去年から一人では大変といようなことなので、私のほうは団体で引き受けするといようなことなので、営農組合で引き受けをしていると。これ一応三年間、後継者になり得る十分なり得る方だといふように思っております。ただ、非常に条件がありまして、ちょっとその国で、総務省ですかね、事業でやってるんですけども、年齢が40才未満、40才までですかね、それから大都市出身者といようなことなんです。ですから、加美町に居ますといっても中々対象にはならない。しかも家に居ますといってもならないといようなことなので、少なくとも政令市あるいは大都市といような形で、こいうところでないとならないとい、ちょっと悔いはあるんですけど。たまたま私のほうでもこいう話があつて、あれば引き受けてもいいななんてい話をしている最中に実は東北大の農学部先生ともお付き合いがありまして、いろいろ話をする間にそんな話も出まして、それじゃこいう形でとんとん拍子でまとまって、こちらのほうに今日来てますけれども、ちょっとこっちに来てください。市川くんです。この方横浜で、大学は東北大出身です。農学部出身で、横浜のほうでIT企業の仕事をやつてまして、農業に行きたいといような形で、今年の5月から来ているとい。実は一番最初に来る日が、大震災の日だったんです。新幹線かバスでも来るのかなとい話した時に、突然あの大震災でもう連絡取れなくなってしまつてダメになつてしまつたんですけども。電話開通してから再度連絡を取つて、5月から、震災で1か月遅れてしまつたとい形できております。そんな形で大学とも今でも連携しながら、後継いで何回か大学生が来て一緒に田植えしたり、その他にも稲刈り来たりとかいろいろやっております。私のほうも子供達と後継者問題。これは私のほうも数は多いんですけども今入ってくる後継者がなかなかいないとい形でどうしようかといことで、当然その営農ついで法人化とい話も当然出てるわけですけども。やるにしてもいずれ契約やなんかするにしても、東北大の先生のほうに頼んでいろいろ分析をお願いしようといような形で進んでいるところなんです。それから、先程環境保全米といようなことなんですけれど、その農地・水の二階部分、加美町は5集落が取り組んでいる。この度初年度に1集落が早く取り組んだところがありまして、県の方から最初から取り組んでいる市町村は入れますよといような形だったので、私のほうも入れたとい形で。うちらほうの8割ぐらいの面積が環境保全米、しかもその内の2割近くが有機栽培とい形でやっております。実はこの農薬の消毒なんか非常に神経を使いながらやらなければと、有機のほうに行かないようにやつていかなければいけないとい形であります。集落活動組織は、普通会長さんがああしろころと出てくるのが多いんですけども、それではだめだといことで、うちのほうは三部会の部会制を作りまして、そこに人がいるわけではないですけども、こいう活動は何部会、こいう活動は何部会といことで、部会長、副部会長に年間の総会等とかの事業をやる場合にはその人が主体となつてやつていくと。時々、常々、2か月に一回、役員会を

しますけども、全部段取りをして、人の手配もその部会がやるということでございます。それを委員長が、会長が一人でやるのでは、到底出来かねますので。あと報告書は即会計のほうに上がってきて作業するというような形でございます。あともう一つ、営農組合のほうで、ちょっと抜けましたけれども、「やくらい稲穂の国」というのが前からありまして、これは切り餅の生産・販売です。さっきの場所に実はあそこにシャッター閉まっている部分、外から見てシャッターの部分が、あそこが改造して、切り餅の製造場所になっております。あそこで、おもに今はお正月主体になってるんですけども、今来てる女性部もあるので、年間通して何とか出来ないかというような形で今いろいろ働きかけながらやっているような状況でございます。それからあと、お米の販売なんですけれども、向こうで野菜も販売してもらってるので、その朝市の中で、お米の注文も取っていただいて、私のほうの減減で作られた、環境保全米これが松陵地区のほうで販売されているということで、丁度今、ちょっと前ですけども、度々トラックで運んでいくと。向こうであと値段は出してもらうというような形でやっているということです。それからさっき、支援物資は水とかそんなものですけども、あとからやっぱりお米が欲しいということで、お米はちょっと仕入れが大変なので有料でしたけれども、お米も提供。ところが、3月4月になってくると、お米もなかなか保有してる方も在庫が無くなってきてるので、私どもも大変だったんですけども。それからあと野菜、これについては提供して無償で置いてきたというような形でいろいろ活動させていただいております。以上でございます。

大泉委員長：はい、ありがとうございます。非常に活動をおやりになっているようで、活性化をしているなという印象は受けるんですけど、今日の農地・水・保全管理事業との絡みで言うと、これは主に活動というところはどういうことになりましようかね。農地・水・環境保全向上対策を入れたと、それ契機に集落営農で動き始めたんですよね。違うんですけど。

おのだ城内 府田氏：だいたい同時です。

大泉委員長：同時で。それで集落営農でやる時にいろんな活動してるっていう、それはすごくよくわかるんですけど、その際のその例えば環境保全だとかさっき見たところなんかそうなのかもしれませんが、あと水質保全だとかおやりになっているんだらうと思います。この辺を説明してもらおうと、ありがたいんですけどね。

おのだ城内 府田氏：環境保全って私達、川の一番上流、上流地域にいるわけですので、やっぱりその水をきれいにして下流まで持って行くのが我々の義務だというふうに思ってますので、なるたけきれいな水を作っていきたいということと、やっぱりきれいな水で米を作っていきたいというのがまず一つで、その時うちの組合長の発案だったんですけども、今からのお米って慣行栽培で売れるでしょうかと、消費者の方々はその環境保全米といわゆる減減で農薬の少ない、あるいは化学肥料の少ないお米がこれからは要望される時代じゃないかと、だったらせっかくこういう制度があるんです。制度に乗って助成金をいただきながら、軌道に乗せてやっていこうかということが出て来たということですね。これも農地・水・環境保全のことを一階部分とやっていて、せっかくですから二階部分もやろうかと、一年遅れたんですけども、そういう形で進んできたということだと思います。やっぱり今消費者の求めているものを、我々もそれに一定程度答えながらという形かと思えます。

大泉委員長：ビオトープを作って、環境保全だとか何かやりながら、それを中心に何か活動はされているんですか。

おのだ城内 府田氏：特別ですけども、実は遊休農地になろうとしている、実は見ると非常に立派な田んぼみたいなんですけども、非常な湿田なんです。大変苦勞しておりまして、なかなか作付けも困難だったんで、そこでいろいろ地主の方と話して、しかもあそこ非常に目立つ場所。当然わかる通り、加美町と言えば薬菜山ですよ、薬菜の玄関口ですよ。荒らしとくわけにはいかないので、とにかくビオトープを作ってやろうということで。それであそこに実はビオトープを。ただ池を作ってもおもしろくないということで、実は日本地図で掘りました。北海道、本州、四国、九州というような形の池が四つあります。分けてあるんです。そういうことを子供達に教えながら、あそこで例えば一番上の所は水を浄化するような形にして、二番目からやろうということで。あそこに水質浄化剤を入れております。下流で一番下のほうで調整をしながら。それは現場の子供達と地域内の育成会の子供達と一緒に活動して、あるいは農地・水のほうでもあるわけですけども、そういった意見も保全というような形。それから、その中で生き物調査ということで、飛んでいる地上にあるものではなくて、水の中にあるもの、あるいは草、雑草ですね。どういうものがあるかというのも一つ一つ、みんなで辞書を引きながら、教科書開きながら、子供達とこんなものもあると。常によく見てるんですけども、名前は分からない、いつ花咲いてるのかというのも分からないということで、まあ一つそういう勉強もしましようということであそこではやっております。一つの農地・水・環境保全の目玉というか、原風景を作ってみようということで、あそこはたまたま農業用水でやったんですけども、今の時期は農業用水が全部切れて、水が入ってこなくなるとビオトープでなくなるので、あそこに副水路を作って水車を回して水を上げています。水車の水であそこは補っていると。せっかくきれいになった水ですので、その水を今度はアート水田にも持って行って、アート水田ではこのお米を作っているというような形であります。

大泉委員長：なるほどね。農林水産大臣賞を授賞しているの、活動が多方面に及んでいて、全体のイメージがなかなか委員の皆様はつかみづらいかもしれませんが、今のお話を伺って、質問でもよろしいし、感想でもよろしいし、いかがでしょう。どなたからでも結構です。はい、どうぞ。

田村委員：ご説明ありがとうございました。多くの組織が生産ですとか、農地の管理というところだけに集中しがちなところを、こちらの組織ではそこ以外、例えば子供達の民泊などのグリーンツーリズム活動とうまく連携して、大変活発に活動されているということがよく分かりました。さすが農林水産大臣賞を受賞するというだけにはあるなと思えました。外部との連携をどうやって図るかというのは、いずれの地区でも興味はあるがそのノウハウがわからない状況にあると思うんですね。これについて詳しく教えていただきたいと思えます。現在その松陵で日曜日に朝市を毎週やってらっしゃるというお話でした。私の記憶間違いかもしれませんが、最初から朝市という形ではなくて、最初のころは、松陵の秋祭りかなんかに試験的に販売に行っていたような記憶があります。多分そういったことから段々に継承しながら現在の形になってきたと思うんですけども、今のように活発に活動されるまでに、だいたい何年ぐらいかかったのかとか、その中でどういった工夫をされてきたのかについてお教えいただくと、多分他の地区にも参考になるのかなと思えます。

大泉委員長：はい、どうぞ。

おのだ城内 今野氏：今野と言います。よろしくお願ひします。松陵の朝市にどうしてなったかと言われますと、大変深い根っこがございまして、なかなか一言では言えないんですけども、松陵地区との付き合いの最初はグリーンツーリズム、旧小野田町時代から松陵中学校が来ておりました。大変いい学校ですね、是非こんないい学校とお付き合いするん

だったら、おらほの地区だけで独占したいと思ひまして、独占させていただきましてね、それにつき合っているうちに、昔の農家のたいへん人のいいところにお客さんが来ると、もてなしをいっぱいして、それでああ良かった良かったさようならとそれで終わってしまうグリーンツーリズムは、大変不満を持っておりまして。是非松陵地区まるごとお付き合いをして是非田舎と都会の付き合いをしたいなと思ひて、町内会のほうにお声をかけました。そこで、うんじゃまあ、いきなりもなんですので、うちらほうの祭りに来いよと、うちらほうの野外の温泉に来いよと、そういう付き合いから段々始まりまして、そのうちにお祭りに行けば当然物品販売とかなんかありますので、野菜の販売とかそういうのはやっていたんですね。その中で私達も段々図々しくなりまして、六千戸もある地区ですので、ちょっと米なんか売ったら、おらほの営農組合は大分豊かになるんじゃないかななんて思ひて問いかけたところ、「いいですよ。」軽く返事が返って来まして、その辺もうまくいきまして、試食会をやったり、交流会をやったり、だいぶ深い付き合いになってきまして。せつかくここまで来たんだからということで、災害協定を結んだんです。別に災害協定ありきで松陵と付き合いただけではなくて、一つのお付き合いの結果が一つは災害協定で、今回震災のおかげでそれだけがだいぶ目立ってきてしまったんですけども、それは一つの付録みたいなものでして。それでも野菜のほうも、別にうちらが野菜売ってたから売るといふものでもないんです。向こうも私達と長い付き合いしてから、農業に非常に興味を抱ひていただきまして、農業の勉強をしたいんだと。そういう向こうの役員さんのほうから声が出まして。いくらでも引き受けますということで、野菜市ということで向こうでもやっているんですけども、逆にこちらで畑も提供して向こうから来て畑も作っているんです。今、松陵の体験ほ場ということで、面積は一反歩くらいかな今のところ。そこで野菜を作っただけで体験していただくと。農業がこんなに大変なんだよみたいなことを。初めての人達もだいぶ来ますね。一回で10人くらいずつ来ますので。体験してもらおうと。野菜のほうもあと、別に何と言うんでしょうね、向こうも野菜で儲けようと思ひてるわけじゃないし、向こうの野菜って実はコミュニティの手段でやっているんです。団地が高齢化になってきているので、買い物難民も都会の方で起きてると。あと家からなかなか出て来ないお年寄りもいると。それをどうにか引き出せないかという向こうの町内会の思惑もありまして、野菜市をやっているようでございます。こういったお互いの利益が重なって、野菜市という形になっているので、一方的に行ってるわけでもないし。うそみたいにうまくいっている話ばかりなので、どうぞまね出来るならどこでもやってください、ご指導しますみたいな形です。

大泉委員長：なるほどね。はい、どうでしょう。これはなかなかファジーな活動を積み重ねていたら、形になってきた。はい、どうぞ。

長田委員：加美町と松陵の交流関係というのは私もずいぶん前から、後藤さんやなんかが一生涯懸命やってたので、知っているんですけども、県の方もこれは参考になると思うんですが、丁度行ったり来たりするのにいい距離なんですよ。そんなにうんと遠くもない、近すぎないということで、都市と農村を繋ぐにはとってもいい距離だと思うんですよ。町田市とやってた地域もあったんですが、町田市だとやっぱり一方通行になっちゃうんですよ。物を送るんでも顔が見えないという。始終行ったり来たりはできませんから、農業体験するのも、せいぜい年に一回とか、そういうことになりますので、これはちょっと県でもこういう関係をもっと他の地域に、進めるのに非常にいい距離ではないかなと私は前から思ひて見てました。もちろんそのきちんと受け入れて、いい感じにして、子供達を返してやるというところから始まったので、それはもう農家の方々の受け入れの問題だと思うんですけども、これは非常にいい例だなあと思ひて前から私思ひていました。ちょっと下世話な質問ですが、災害時にこちらからいろいろして差し上げましたでしょ、松陵に。そのリアクションみたいなのはあったんでしょうか。それからあとこれはちょっといい取組で私も期待していたんですが、やくらいというと結構きれいな場所が多いんで

すよ、景観的に。センターの周りとかそれこそ加藤専門委員の地域の周りとかすごくいい感じの所が多いのに、さっき見たところ、殺風景な地域だなあという印象を持ちました。それでビオトープやなんかがあるのに、ちょっとよく見えなくて、バスに乗ったら、「あ、これか」という形で見えたんですが、非常に周りが殺風景で景観的には全然魅力がないなあ、すいませんが思ったんですが、これからどうしていくか、お考えがあるのかどうか。

大泉委員長：はい、どうぞ。

おのだ城内 今野：まず、災害協定の反応ということで、反応と言われても大変感謝されてますというしかないんですけども、数字的に言いますと今までお米のおつかいやっていたのが、2倍にはなんないかな、1.7倍くらいに増えました。是非加美町のお米買いたいという人が大分増えたんだろうなと勝手に解釈しときます。あとはそうですね、またこないだも向こうの防災訓練に行ってきたんですけども、やはり大変温かく迎えていただきまして、一緒に協定訓練していきたいと。だいぶ交流も更に深まったなという感じは思っております。

それから景観の問題ですけども、困ったな。もう一週間早く来られたらコスモスいっぱい咲いて大変きれいな景色だったんですけども。花が全部落ちてしまいまして、私見ても汚いなと思うんですけど。精一杯きれいにしようとはしてるんですけど。

沼倉委員：周りにちょっと木ね、植栽するとか。

おのだ城内 今野：すいません、水田なもんで木植えたりは出来ないし、小屋建てるのも精一杯がまんして建てたもんですから、元々の景色を知っていればだいぶきれいになったなと言ってもらえると思うんですけども。だいぶ荒れてたんです前は。その辺きれいに草刈ったりなんかしてと思います。あとは地域広いですし、菓菜山がもっときれいに見える場所もありますし、あと国の重要文化財等もうちの部落の中にありますので、うちの隣もなってますので是非一度いらしていただければ、いいところもありますので見てください。

大泉委員長：なるほど。はい、ありがとうございます。はい、どうぞ。

おのだ城内 府田氏：水車ですね、あれで直径は相当大きいですよ。ところが水路が深いので、あれで直径が3m・4mあるんですよ。ところが半分しか上に出ないんです。道路が高いので、我々やっぱり作った時にこんなに小さいのかと思ったんですけども、あれ以上あげるとするのは危険という感じで。水量がこんど必要になってきますので。初めのうちは木が乾いてるので軽いので、ちょっとの水で回るんですけどけれども、二年、三年すると、水分をものすごく含んでるので非常な水の量が必要なんですね。ですからあれ以上1メートル2メートル大きくしたら、町の下のほうで水害起きてしまうぐらいの。みんなが来ないと、入れられないというような感じもあるので、だいぶ苦労したんですけども。ただ元々の水路で万一事故あった場合に、水が流れないと困るので、ちょっと会長さんと話したんですけども、副水路で水車を回して、万一災害が起きた時には、水車止めても水は川に行く、水路はそのまま確保しながらやっていると。確かにあれ1メートル高いともっと違うと思うんですけども、1m上げるということは直径でいうと2m上げなきゃいけないですよ。とてつもない大きい水車になっちゃうということで、というような状況です。

大泉委員長：はい、どうぞ。

内川保全隊 文屋指導員：水車で何かやっているんですか。

おのだ城内 今野氏：水を上げているだけです。

内川保全隊 文屋指導員：発電をするとか、そういう…。

おのだ城内 今野氏：いや、発電は。

大泉委員長：どうぞ。

真木副委員長：農林水産大臣賞受賞おめでとうございます。本当にうれしく思います。我々この委員会メンバーは、この事業がどういった成果を上げているかということ、現地調査させていただいて、もし制度設計の不備な部分があればそれを正していくとか、もう少し予算をつけるべきだとか、実績を見ながら事業を評価させていただいているところです。皆さん方みたいに非常に大きな成果を上げていただいているということは、非常にうれしく思います。是非今後ともまた更に取り組みを活性化させていただいて、地域を発展させていただければなと思っております。その中でちょっとPRをさせていただきたいというふうに思うんですけども、私、宮城県農業公社というところにいます。丁度資料の中に六次産業化に向けた取り組みというふうなことが書いてありましたので、農業公社の中でいろいろアドバイザーの派遣なんかも無料でさせていただきますので、何かご用命があれば一つお申し付けいただければなというふうに思いますのでよろしくどうぞお願いいたします。ありがとうございました。

大泉委員長：いかがですか。それでは鈴木専門委員。

鈴木専門委員：本当に素晴らしい成果を上げられて、本当に参考になると言えますか。私自身実際一つ仙台市の中で、山形の田舎と繋げた所がありまして、同じように街中農園ということで仙台市の方にも農を知ってもらいながら繋げているんですけども、なかなかちょっと山形との距離というのものもあるのか、あと間に役場が入っているせいもあるのか、思うようにこちらのようによく進んでおりませんで、私自身は間に入っただけで、あと抜けてしまったのですが、最近ちょっと相談をいろいろ受けまして、どうもお話を聞くと先程加藤委員からも出たように、若者の数がちょっと少なすぎるのかなとこちらのほうの活動を聞きまして、ちょっと若者の数が少なすぎるのかなとちょっと思ひまして。あとそれからもう一つ、多分女性の力でしょうか。その辺が、どのぐらい女性のパワーというところこういう会議というとなかなか具体的に出てきませんし、参加もされない。このメンバーの中を見てもこちらの委員以外女性の方そちら側とても少ないので、女性の力がどの程度必要なものかというのを教えていただければと思っております。よろしくお願ひします。

大泉委員長：では沼倉委員。

沼倉委員：元々この地域の人達というのは非常に意欲的な方達が多いんだと常日頃思っておりますけれども、この農地・水・環境の取り組みから更に飛躍したと言いますか、更に結束力が強まった結果だなというふうにお見受けしました。私も仙台の住民なんですけども、仙台市の水は全然来ませんでした。なので松陵の人達は本当に良かったなと思ひました。でもやっぱり協定を結んだことが、そのきちんと実行されたと言いますか、そういうことがきっかけで、関係がですね、強まるんじゃないかなというふうに思ひました。それとお伺ひしたいのは六次産業ということはここに書いてあるんですけども、やはりその若い人達が働く場所があるということが、やっぱりその定着するということに繋がるかと思うんですけども、餅の加工ですとか、それから今バスで見て来ましたが、

大豆をたくさん栽培されている地域がありましたけれども、味噌加工も検討しているというふうに書いてありますけれども、今後どれぐらいのスパンでそういうことを軌道に乗せていこうとしているのか、もし分かっていたら教えていただきたいと思います。

加藤専門委員：六次産業化ということで、私達があそこの加工場に手をつけたのが、まだ10年にはならないかな。それで最初に餅加工ということで、最初は張り切ってやったんですけど、なかなか軌道に乗るといふか産業にまでは中々ならなくて、切り餅の販売は適当に売ってるんですけども、年を通しての加工業というふうになかなかたんですけども、今年あたりからリタイアした女性達が次々と集まって来まして、あそこもそろそろ有効に活用出来る時期が来たのかなと喜んでるところなんです。現地説明したところで草取りをしていた女の人達がだいぶやる気出してきました、味噌加工やろうかとかお菓子作りしようかとか、シャッターの中見せれば良かったんですけど、最近機材を集めて来ましてだいぶやる気なので期待はしております。実際どこまでやるかわからないけれども、バックアップはしていきたいなと思っております。さっき女性の力はどうなんだと言うんですけど、かなり大きいんです。グリーンツーリズムするにしても何をするにしても、まずは女性の力なので、そのへんは大事にしながら大変気を遣いながらやっております。

大泉委員長：はい、ありがとうございます。これもまた後で合同の意見交換がありますので、その時にまたご協力いただければというふうに思います。次に進めて参りたいと思いますが、中山間地域農村活性化事業、これを使っておられます内川保全隊について意見交換をしたいと思います。まずちょっとご説明を先程の地理としてご説明いただきましたが、更に込み入ったことあれば、よろしくお願ひします。

内川保全隊 文屋指導員：それでは私のほうから、説明・補足させてください。大尺の方、それから今お話をいただきましたおのだ城内さん、どちらも農業に深く関わっているという形で活動されてるように思いました。我々は今ご紹介していただいたように、環境整備、水というものをテーマに活動しておりますので、ふるさと保全体というような名前を付けております。更に内川というものに限定しますので、頭に内川というタイトルを付けさせていただきます。我々の活動は皆さんの出典ごとの資料を見ていただいても分かるように、中山間地からのふるさと水地域への活動ということで多大な助成金というものをいただきながら、活動を更に活性化を見出していくということでございます。

それで我々は一番重要に思っておりますのは、啓蒙活動それから交流をもって地域の振興を深めていく。要するに水の汚れというものをどのようにして防いでいくかというようなことと、我々が持っている岩出山の良さっていうのは、やはり水がきれいだとすることが大きな地域性のメリットだと私どもは思っておりますので、それを長く我々に止めおくことなくこれからの後世にも維持をしていく。それで皆さんもおっしゃいました小野田のほうでも上流だということでございます。その我々の内川も実は江合川というものが本流にございまして、そこから前段の説明でも申しましたように、その主流として人工堀をした内川というものにございます。そういうことで基本的には古川までずっと、江合川から取水して最終的には北上川に注ぐというような経路の内川でございまして、そういう意味では上流に位置する私どもにとってはやはり、責任ある水の管理というのが望まれるのかなというような思いでもございますので、啓蒙活動をしながら水の保全と言いますが、汚さないようにしようというような啓蒙をしております。そういう中で4月、7月、8月、11月、2月とそのような、大まかに言えばこのような形をやっておると。それで中身もですね、もちろん清掃活動は当然ですけども、こども祭りという写真をひとこま載せてもらっておりますが、これが非常に保全隊活動には欠かせない要素でございます。と申しますのは、先程鈴木専門委員からも女性の割合と言いますか、どのぐらいその活動に寄与するのか、他でもございませぬ、我々の内川保全隊は半数以上が女性でございまして。そ

れで女性がやはり主体になっていくのに対して、男性が何と言いますか力仕事は男がやらなきゃだめだよというようにタイアップしている。それと同時に大きいのは、子供を取り込んでいく。そうしますと、子供には父兄が必ずつかなきゃいけない。そういうことで輪がどんどんどんどん広がるといいます。この祭りというものを通しながら、何が関係あるのかと言われると私どもが強調したいことは、助成金を上手に使わせてもらって、それで子供達を大いに集めよう。それで子供に対する単なるお祭りというのではなくて、勉強会を含めながら子供を寄せる。そうするとそこに父兄が来る。父兄が来ればじいさんばあさんも来る。そうすると家庭の中で一つの共通話題ができる。地域活性と思ってお祭りというものも年に一度。人数的には 300 人程度が集まって地域内でやっていますけども。今年で 23 回目になります。ということで長く続いております。あとは内川の中を土地改良区とタイアップしまして、水を止めていただいて中に入りますが、空き缶とか空き瓶、様々なものが捨てられておりました、当時は。ただ今日ご覧になっていただいたように、大変そういう意味では浸透作戦が徐々に効果を出してきているのかなと思います。川に捨てるというゴミの量かなり少なくなっております。当時は 2 トンダンプで 2 台ぐらいあげましたけども、今やはり一時間から二時間ぐらいの作業でやりますけども、2 トンダンプで 1 台まではいってないくらいに収まってきております。これも啓蒙活動というものが徐々にではございますが、浸透してきたのかなと。この写真の中に水が無くなって緑色に見えるのが、まつもなんです、かわもって言うんですか。要するに名前はまつもと言うらしいんですが、それで大尺さんのほうでは、まこもだけというのを栽培してるといようなことではございますが、そういう話を聞きながら、私も今ちょっと思っていましたのは、我々も自然から恵まれるものの商品化というものを、考えようかなと思って今、急遽考えているんですけども。このまつもを今日トイレタイムで寄りました道の駅ですね、あそこである特定の方がここからまつもを採取して、販売していると。そんなうわさも聞いておりますので、茹でておひたしにして食べると非常にシャキシャキ感があって、非常においしいと。そんな話も聞いてますので。是非これを名物にして環境からいただけるそういうものが採れますよという清流にしていきたいなと思っております。また皆さんからいろいろアドバイスをいただければ幸いです。大泉委員長よろしくお願ひします。

内川保全隊 真山隊長：バイカモって言いましてね、6 月になると梅の花のような花が咲くんです。水をきれいにする草なんです。いっぱい出てますので。ただ今年木が倒れてちょっと機械が入ったので、半分になっちゃっていますが。でもすぐ再生すると思います。

大泉委員長：ありがとうございます。もう 20 何年になるだけに、お金の使い方から行動の相互関係まで理論化をもうされて、全ては内川をきれいにする為にその風景にする意義も明確になっていて、内川をきれいにする為にはやはり啓蒙活動が全てだと非常に大事なんだというところで、イベントもそれから人々のイベントの活動設定もそれに結び付けるという手立てになっているようす。それで今日はこの会議の成果ももう出たようで、販売欲も出てですね、急遽多分そうしたことが世を通じて定着していくんだろと思ひますし、そういったご報告をいただきましたが、感想を委員の皆様方からお願いを出来ればというふうに思ひます。はい、加藤さん。

加藤専門委員：改良区委の立場で言ひますと、私も本当に感謝を申し上げたいと思ひます。まだまだこのままであっていいのかな、という感じがしないでもありません。大崎市の古川に緒絶川に行くんですねこの水ね、加美町にも来ています。緒絶川の源流だということで、古川との交流と言うんですかね、その辺の連携があってもいいのかなと。その媒体を改良区さんに取っていただくとか、今後清掃だけでなく、あそこに鯉を離してますよね。そういったことも含めて、その水は我々がきれいにしてるんだよというね、その媒

介を誰かやっただけならばなあという感じもしないでもありませんので、その辺を会長さんががんばってください。

大泉委員長：はい、ありがとうございます。そうか緒絶川に続くんだね。

内川保全隊 真山隊長：そうなんです。内川は緒絶川と続くんです。それで古川にも。西古川のほうにも大井川という川があるんです。そちらにも行ってるんです。

真木副委員長：緒絶川で今、藤棚の整備されているんですね。先程、こちらの地区でも藤棚整備されてるといようなお話もありましたけども、もう少し何か観光に、こんなにきれいなものを作っていただいているんだから、もう少し何か踏み込んで、工夫されればというふうに思います。今も加藤専門委員のほうからもお話があった通り、緒絶へあれだけきれいな水を運んでいってるということから、二つが連携して何か交流が出来れば人の流れも出来るのかもわかりませんよね。是非これを観光資源に結び付けていただければと思います。

内川保全隊 文屋指導員：春には桜が咲きますし。

内川保全隊 真山隊長：うちのほうも藤棚を作る青写真はできている。あと大崎市さんからいろいろとご協力をいただいて、パイプ等も提供してもらっています。今度これを実践するんです。これがなかなかまとめるのが大変で。

真木副委員長：だいぶ緒絶のほうはあれで商売してますので。立派なクラブも作ってね。是非何かそのへん一儲け考えてください。

大泉委員長：同じ大崎市だしね。はい、どうぞ。千葉専門委員。

千葉専門委員：ちょっと質問をさせていただきたいと思うんですが、ここの水路は大崎土地改良区の管理だと思うので、先程の説明の中で何か協定と言いますか、そういうのを結びながらやってるといような話なんですが、土地改良区はその活動の区分とか数の仕分けとかあるいはその連携の仕方ですね、そういったものはどういうふうになっているのかちょっとお尋ねしたいんですが。というのは大崎土地改良区では毎年10月ごろに、内川水土里ウォーキングをやっていると思うんですが、そういったところとの連携を持ちながら一緒にやっておられるのかどうかですね。

内川保全隊 真山隊長：かなり人が参加されてまして、結構リピーターが多いんですよ。そして毎年参加するという方、また子供を連れて30分くらいこう歩くということで。結構リピーターも多いし子供さんも来ますし、先程の説明の中で啓蒙啓発ということにも力を入れているうなので、連携をしながらあの人達と一緒にやれば、更に成果が高まっていくのかなと思います。

大泉委員長：はい、どうぞ

内川保全隊 文屋指導員：今千葉委員から示された内川の水土里ウォークですね、土地改良区の。今年も10月に開かれました。私も保全隊の一員でもございますが、特別と言いますか特別粋みたいな感じで直接お付き合いがあるもので、バスの運転から何から、で去年と今年と参加させていただいた。今年の水土里ウォーク、32名ほどの参加でした。私がお世話した部分が10名ほどおりましたので、内川ふるさと保全隊として参加させてもらうのもいいんですが、あまりに人数が多くなるのもなというようなことで、個人的に誘いをか

けて今言った形で連携をとっているというようことでございます。また清掃活動については、会長が申し上げるように協定を結ばせてもらって、来年で五カ年の一期五カ年ということの中で、再延長するかどうかというのは、おそらく来年にはその話が出るだろうなという、3月なんです。どのような関わりかと申しますと、先程も言ったように内川の清掃ということで、これ簡単なようにして私も始めてわかったんですが、川の水を止めるということは大変なことなんです。というのは堰をぼとんと落とせば水が来なくなるんでないの、それはそうなんだよと。ただその為には警察、消防、地域の振興会、全部に連絡出さなきゃだめだと。こういう背景があるのを聞いた時に、なるほど水っていうのは全体の各行政ばかりじゃなくて、自治体とかそういったようなものに全部関連をするのだなということを改めて思ったわけなんです。それでもう一つ付け加えさせてもらえば、今町の中を流れている側溝という部分につきまして、実は私は生まれは三本木でなんでございまして、当時縁あって30年もう40年近くなるんですが、岩出山に来たということのなかで、その当時から水のきれいさにはびっくりしておりました。当時三本木のほうは、もうボウフラが湧いているという状況でございましたので、こんな岩出山ってすごいなと思っておったんです。ところが最近その側溝というか、どぶのほうには水が冬場は流れなくなってきた。それで地域の方々にも聞くんですが、冬も水流してもらえないのか、その辺あんた達運動してみたらいいんでねえか、というような声が出ております。これを土地改良区の方にお話をしましたら、やはり水というのは、水利権というのがあって、江合川から内川に流す水というのが、年間何千万トンだか数字はちょっと正確なところ分かりませんが、そういう契約をしてるそうなんです。それでどうしても農繁期には大量の水が必要とするので、そっちに軸を置くと、冬場に流しちゃうと今度農繁期に水が使えなくなると、そういう我々には分からないその水の大事さがあったのかと思ってね。そういう中でも何とか出来ないものかなという思いが今してるっていうことを、皆さんにご紹介したわけでございます。

大泉委員長：まあ、そんなこともあり、なかなか大変そうですけど、だけどいいことをするのはいいことだから、いろいろ融通を利かしてもらおうとありがたい話だろうと思えます。他の委員の先生方、どうですか、はい、どうですか島谷さん。

島谷委員：私は10年ほど前に岩出山で「千葉家住宅」と言いましたけれども、古い民家の改修にかかわらせていただきました。ここは、現在「凧菜上の家」となりましたたくさんの方が訪れる施設となっています。その改修とこの施設をどう使ったらいいのかという活用策の二分野について私どもの会社でお手伝いをさせていただき、私は活用策について担当いたしました。

その時、活用策を考えるためには、まずは岩出山という所をよく知らなければならないと思ひまして、毎日リュックを背負って仙台から岩出山に通いました。岩出山では、郷土史に詳しい地元の先生をお願いをいたしまして、先生の後ろを自転車についてまちじゅうを回りました。走りやすいところだけではなく、山の中入ったり、藪の中に入ったり、つまりいろいろなところから岩出山を見ること、そして、どこから見たら千葉家住宅が一番美しいのかということ調べました。景色だけではなく、地元で伝わる食べ物、風習、植物、花、生物などなど出来る限り調べました。

その際、内川周辺も何度も歩きまして、まちの中にああいう川の景色があって何て良い地域だろうと思ひました。今日久しぶりに内川の景色を見せていただきましたが、当時よりも更に整備をされておられて、大人から子供までこの地域の皆さんがこの地域の景色を、また水をきれいにされているということがわかりました。そんなふうになさっておられるので、先ほど副委員長からお話がありましたけれども、是非もう少し観光面を意識されたら良いのではないかと思います。せっきやく岩出山を訪れている方にあの川沿いの道を歩いていただいて、少し町に滞在していただく時間を長く取っていただくような仕組み

を作る。これは各方面と連携をされたらよろしいのではないかなと思います。

それから、先ほど「まつも」のお話が出て楽しく聞かせていただきましたけども、せっかく学問の道ですから、例えば「学問の道・内川まつも」などネーミングして、「内川のまつもを食べると頭が良くなる」のような楽しいコピーがあると、外からの人には響くと言いますか、「まつも＝内川」みたいなことになるのではないかなと思います。

これは大尺の皆さんがご尽力されているブルーベリーにも少し共通していまして、住んでいらっしゃる方にとっては当たり前の農産物かもしれないのですが、パッケージやネーミングを工夫することによって、展開によっては「ブルーベリーといえば大尺」のようなブランド化になるのだと思います。

そういう意味では、普段地域にあるものを上手にお使いになって、もっと地域のさまざまな方の知恵をいただきながらなさっていくことも大事なのではないのでしょうか。

一つお伺いしたいことがございます。視察させていただいた時に、活動は年4回くらいというふうに教えていただきまして、どなたかの質問に対してボランティアの方がずいぶん一所懸命に取り組んでおられるということをお伺いしたのですが、そのボランティアの方は自発的に動いておられるのでしょうか、それとも皆さんのほうからお声がけされて活動されておられるのでしょうか。

内川保全隊 真山隊長：それはですね、隊員の中でそういうものすごく関心のある人がいて、それですごく協力的で、その方は定年退職してるわけです。家に居てもぶらぶらしてるものだから、そういうことをしたいなと思って話をすると、全部の草を刈ってくれている。私らが本当はしなくちゃいけないのになと思って行くと、もうちゃんときれいになってるんです。そういうボランティア活動、隊員の中のボランティアですから、それは当然隊員がやっているんだからそれはよろしいと思うんですけども、その他に事業の中で勉強会をさせていただいているんです。研修会と言いまして、いろんな地域を見て回って、他の地域はどうかということも勉強している。そういう勉強会をしておいて、うちのほうもこういうことも必要だねとか、こういうことは進んでやるべきだねとか、この視察旅行してバスの中で話し合ったりなんかしていると、それを聞いている隊員の中に率先してやってくれるという。ただ一番大変なのは、7月末に枝刈り、今日きれいになっている木のところね。あれは7月の末にやるんです。8月の第1日曜日に内川祭りって地域でやるんです。有備館を中心にお祭りするんですが、その時遊歩道をお子さんとか大人、結構な人数がクイズをしたりして歩くことがあるので、その前にきれいにしようということで、必ず7月末にその清掃活動をする。それは本当に大変なんです。機械が今二台しかないんで、もう二台ぐらい買って四台ぐらいでやらないとダメだなと思っているところです。木もたいへん立派な木になってしまったから、枝も立派に伸びてくるんです。予算が出てきたら機械を買って進めていきたいなと考えているところであります。なるだけ委員の方にお答えできるように、まつもの内川とでもして売り出すように、ばいかもですからね、すごいきれいなんですよ。とってもおいしいんです。つるつるして。そういうのもやってみたいと思います。

大泉委員長：はい、ありがとうございます。そろそろ三箇所を一体的に議論をしていたらと思うんですが、課題もいろいろと見えてきたような気がしますので、どなたからでも結構ですが、どの事業に対してでも結構ですが、ご意見あるいは質問感想ありましたらお願いをいたします。いかがでしょうか。はい、どうぞ、それでは鈴木委員。

鈴木専門委員：すいません、ちょっと勉強不足のところがあってわからないので、教えていただきたいのですが、まず今日 TPP もどうなったか分かりませんが、多分世の中の動きがとっても今速くて、私自身もちょっとついていくのが大変なんですけども、走らなきゃいけないんですけども。なかなかそのビジョンと言いますか、町のビジョンというものを作

る時に、どういうふうにしたらいいか、私ももうどうしたらいいんだろうと相談とか受けながらも答えられないでいるんですけども、皆様方はどうしていらっしゃるのか、あるいはこういうことが必要だとか、お金なのか人なのかいろいろあるかと思いますが、その辺のところ教えていただければなと思います。

大泉委員長：はい、どうぞ。

内川保全隊 真山隊長：岩出山の町の地域では、佐藤町長時代ですね、伊達な小京都というような名前を作ったんですね。それで小京都会議に参加して、京都の何物も無いんですが、三代目の殿様と四代目の殿様が、京都の冷泉家から奥様をこちらにいただいている。そんな関係で有備館が出来たり、あるいはいろんな文化が残っているわけです。そういうことを意識させるために「伊達な小京都」というものを頭に置きながら、いろんな活動をしませうね、そんなふうには私は常に言っているんです。まあそこが大事なんではないかな。何かビジョンが無いと出来ないと思うので。そういうふうな形で物事を考えていきませうねと、常にお話しているところです。

大泉委員長：はい、どうぞ。

長田委員：内川のことなんですが、毎年研修視察にどっかに行ってるみたいなんですが、それでどこか参考になるところはあったんですか。

大泉委員長：はい、どうぞ。

内川保全隊 真山隊長：一番はですね、岩堂沢っていうダムね、このダムの視察、江合川が一番最初に山形からこっちのほうに宮城県側に来る分水嶺で、そういう所を見たんですね。その知識が全部無くていきなりはなんですから、そういう勉強会をしたり、それから道の駅、山形県の金山町ですね。金山町へ行って見た時、あれは本当に隊員の人達、感銘いたしまして、ああこれこそが本当の水を大事にすることなんだなという、うちのように大きな川じゃないんです。川は10分の1もない。

大泉委員長：2メートルくらいですね。

内川保全隊 真山隊長：はい、それでも本当に上手に町作りもしていたり、そういうのをやっけていて。やっぱりいろんな所を見て歩くべきだなと感じたということです。

長田委員：そうですか。私あのさつき見学した時は、あんまりそう感じなかったんですが、この写真を見て、ああ似てるなというところが一つあったんです。それは京都の哲学の道にとっても似てるの、この写真が。だからあそこをね。それで今小京都って聞いたので、何か参考になるんじゃないかなと思ったんですが。哲学の道は私は京都に行くと何回も回ってるんですが、あそこはずっと回遊出来てかなり長いんですよ。これは回遊は出来るんですか。ぐるっと川岸を。

内川保全隊 真山隊長：学問の道と言いまして、私が商工会長の時に、コンサルタントのアドバイスがありまして、今言う京都でそういう道路があるんだよと、学問の道というね。そういうことで道路か何か建てなくていけないと言われたんだけど、建てなくてもいいから、そういう道を作っておけと。そして石畳に作って、そこを回遊ではないけども、歩くことは十分できますので、親水公園から有備館まで全部歩ける道路整備させてる。

長田委員：もちろん哲学の道は、かなり長いですし、その間、間にいろんなお店があった

り喫茶店があったり、おいしいコーヒー屋さんがあったり、楽しい道なので、全くまねは出来ないかもしれませんが、イベント的にお祭りの期間だけちょっと屋台を配置するとか、そういう工夫はしてみるのも一つかなと思いました。とにかくちょっと似てるなと思ったものですから。

内川保全隊 真山隊長：そうなんです。それで有備館祭り内川祭りという祭りをする時、有備館を中心にお祭りをしてる。8月の第1日曜日ですので、機会がありましたら是非いらしてみてください。

小山課長：今の関係ですけど、バスの中で内川の水路計画を立てた時に参加させてもらったとご説明したんですけど、その際、その真山隊長さんがおっしゃるように、有備館と一番下流側の今日見ていただいた公園、及び岩出山駅 JR のですね。その三箇所をキーポイントにしまして、導線計画も立てております。それで外遊計画をして、長田委員がおっしゃった哲学の道、これについてもあそこは学問の道スコーレプランというのがその当時もありましたので、学問の道とあと途中ポケットパーク、今日見ていただかなかったんですけども、ここにつきましては、湧水。それで先程指導員の文屋さんがおっしゃった、その水路が常に小さな水路に流れるようにということで、福井県の大野市の湧水の利用、これらを参考にしてあそこは水路の修景計画を立てたんです。

大泉委員長：はい、ありがとうございました。他委員の皆様どうですか。

鈴木専門委員：すいません、ビジョンはお三方お伺いしてみたんですけど、ビジョンについては。

大泉委員長：ビジョンがあっっておやりになっているのか、城内の話は何かファジーでやってたらいつの間にか、なんか一番厳しいような質問になっちゃったけど、どうですか。

鈴木専門委員：あるいは今後でも。あるいは今後やりたいけども、専門の人が足りないとかそういうことでも。

おのだ城内 今野氏：ビジョンが無いと言われて一番つらいところなんです。基本的に私達農家なもんですから、まず農業の活性化と継続的な農業ということが、まず一番の目標かと思っております。うちらほうは、町の中心部で面積も平均耕作面積も小さい所で、多くの農家があったという地域ですから、ばらばらと農家を辞めて行って、そういう状況の中にありまして、本当に他の田舎の部落よりも早く崩壊してしまうんじゃないかと思うくらい、農業がガタガタと崩れている地域でした。それをまずなんとか長年営農できるように、そして住む人が是非きれいな所で住み続けられるようにというそれを目標にやって参りました。その手法として何がいいかと言われても、いろんところからも指導を受けましても、中々具体的に無いので、私の性格からして何にでも手を付けて、何でも一所懸命やっただと。そういう結果今度の結果でして。とにかく農村を農村のままいつまで守り続けられるかというのが、課題だと思っております。

大泉委員長：よろしゅうございますかね。はい、どうぞ。

沼倉委員：小野田城内の皆さんに一言申し上げたいと思うんですけども、やはり消費者と繋がるって、結構手間がかかりますよね。消費者を受け入れたり。それから行っても結構大変だと思うんですけども、でもそれを面倒臭がっているとやっぱりなかなか新しい場面というのは開かれないと思うんですね。皆さんのところでは、結構そのいろんなこと

が積み重なって道が開けたみたいなきらみを感じておりますが、でもやっぱりそれなりにたくさん努力して来られた成果だというふうに思います。生産者も消費者の顔見えますので、やっぱりいいお米、いい野菜、安全なものを作りたいというふうに思いますよね。それはこうすごく大事なんだというふうに思います。それが、集落の成果にも繋がるんじゃないかなって。私生協なもんですから、やっぱりみやぎの産直が40周年続いているというのは、そういう素晴らしい生産者と巡り会っているからだと思いますので。是非小野田の皆さんもがんばってほしいなと思います。

大泉委員長：はい、ありがとうございました。時間が30分まで終わることになってたんですけど、オーバーしちゃいました。よろしゅうございますか。はい、ありがとうございました。

内川は確かに上の水をどうするか、土地改良事業の一番残念なところっていうのは冬に水がなくなって、私は田舎育ちなんですけど、昔冬でも水があったのが近代化すると、堀に水がなくなってそれで春に水通す時にはゴミと一緒に流れていくと。そういうのをいろいろ経験して、やっぱりいつも水がある状態というのがいいなあというふうに思っているんですが。なんとかその辺も水利権という難しいことを言わずに、前向きに解決してもらえればいいなあというふうに思っています。それから、今日は大尺のほうには、目標をもう少し高くというお話をさせていただいて、まあ販売をしたりということがあるんじゃないのということを申し上げたから、こういうふうになってますし。それから小野田の城内のほうには六次産業化で、もうちょっと前向きにという話をしましたが、いずれもこれしょうがないことなのかもしれないんですけど、六次産業化だとか、あるいは販売だとか言っても、生産があって、生産の延長でのイメージなんですね。だから、その販売だとかあるいは加工だとかそういうところが専門化してちゃ、生産が必要だねという話にはなかなかないんで、非常にその打って出ると言っても難しいようなところがあるんだろうというふうに思います。全ての地域にエネルギーがあるようすし、小野田のほうは若い人達が入っていて、石川君が来てるからうれしいという。新しいビジョンも作ってくれるかもしれないので、一つががんばっていただければというふうに思います。今日は活動組織の皆様にはいろいろご説明をいただいたり、あるいはご意見、それから活発な意見交換などありがとうございました。また委員の皆様には、そのご指摘していただき、その議事の進行にご協力いただきまして、ありがとうございました。マイクは事務局にお返ししますので、よろしくお願ひいたします。

司会：大泉委員長、どうもありがとうございました。本日の議事録は事務局が作成したものを後日送らせていただきますので、内容確認等お願いしたいと思います。事務局から、農地・水のシンポジウムの開催とそれから表彰について若干説明させていただきます。

事務局 佐藤：農村振興課の佐藤です。本日配布しております封筒の中に、一枚両面に入れてありますが、「宮城県農地・水・環境保全向上対策地域協議会」活動組織における優良表彰の実施についてお知らせしております。その内容について報告させていただきたいと思ひます。

農地・水・環境保全向上対策事業、現在の農地・水・保全管理事業は本年で現対策が最終年を迎えます。また来年から次期対策が始まることから、今後の活動等の向上を図る為に、宮城県農地・水・環境保全向上対策地域協議会において、県内の優良活動組織の表彰を実施したいと考えております。それにつきましては配布した資料の通りとなっておりますが、来年の1月20日に、表彰式を含め事例発表含めたシンポジウムを開催したいと思ひております。またその表彰にあたっては、選考委員会を行いたいと思ひておりまして、その選考委員の中に施策検討委員の方から2名ほどお願ひしたいと考えておりまして、またそれにつきましては後日お話をさせていただきたいと思ひます。

また、表彰の種類となりますが、配布している裏面になります。会長賞を始め五つの賞を考えておりますが、その他に現在特別賞と言いますか、知事賞も行いたいと思って検討しているところです。以上報告させていただきます。

司会：最後に、小山農村振興課長から閉会のご挨拶を申し上げます。

小山課長：本日はお忙しいなか、委員の皆様、専門委員の皆様、今日我々調査させていただきました、各協定、保全隊、組織の代表の皆様他に、県の担当者及び大崎市、加美町の担当の職員の皆様に、一日お付き合いいただき、最後には時間をオーバーするようなご討議をしていただきまして、感謝する次第でございます。

幸いめずらしいほどの晴天に一日恵まれて、これも皆様方のご精進のたまものかと思っております。それで現地視察及びこの討議を通じまして感じましたのは、今回の東日本大震災で、いたるところで絆とかふるさととか、そういうキーワードが随分言われておりますが、今回の三つの組織の皆様には、農業の生産の基盤を保持していただくだけでなく、その周りの農村としてのコミュニティの醸成維持、これにまで大変なご努力をしていただいているなど。またそのような中で、それを確認しまして、都市部との交流も続けていると。これについては大変頭の下がるような活動をしていただいております。

また、今日委員の先生方などからいただきました、これらのご意見やご助言、これを我々この農村振興施策のお手伝いさせていただいている者として受け止めた上、各組織の方々の皆様にも今後広くお伝えしていきたいと思っております。大変熱心なご討議をいただきまして、感謝するとともに、今後は委員の皆様には、今後ともよろしく願いいたしますし、今日お集まりの組織の皆様、地域のその確認にもなると思っておりますので、今後とも活動を十分していただくようお願いする次第でございます。

たいへんつたないあいさつではございますけれども、本日は皆様方に感謝を捧げまして、挨拶にかえさせて代えさせていただきます。誠にありがとうございました。

司会：以上を持ちまして、平成23年度第2回宮城県農村振興施策検討委員会を閉会いたします。活動組織の皆様、委員の皆様、ご出席の皆様、本日はどうもありがとうございました。